

「ここからは、これまで『広報しらぬか』の編集を担当していた歴代職員の思い出やエピソードのご紹介です。現役で一番古く、最も長く担当していた現・地域防災課のKさんの思い出からです。

◆現・地域防災課K（H8年まで）
昭和60年春から広報担当になり、結果足掛け13年、毎月1日と15日の月2回広報紙を発行しました。

一番思い出深い記事は、千葉前町長が月2回休まず連載した「まちづくりの提案」という1ページの寄稿文です。取り組んだまちづくりが、情勢の変化によって変容してしまつた経過や結果を自らの筆で綴りたいと始まりました。それを読んだ新聞記者が「凄いですね。あれは町長が毎回書いてるんでしょ」と褒めます。それと同時に「あの挿絵のイラスト、おもしろいけど、怒られないの？」と心配の声。本文が重々しく見えないよう、毎回、コメディ要素を加えた町長の挿絵を描いていました。絵が目立ち過ぎぬよう薄墨風にするなど気を配りました。

原稿は使用済みのコピー用紙の裏紙に直筆で流れるような文字で書かれていました。毎回苦勞をして書き起こしますが、読めない文

字や難解な言い回しが出るたびに、冷や汗をかきながら町長に質問すると「何だ、読めないのか？」とフリガナを書き加えて原稿用紙を返されました。

この原稿を担当したことがきっかけで、町史や『叢書しらぬか』などを読みあさり、たくさんの町民とお話し（取材）をしました。広報の仕事って笑顔で住民とお話するから面白いって感じました。今となつては良い財産です。



▲当時の挿絵です

伏せませんが、諸先輩方からの息もつかせない叱咤激励を浴びながら作業していたことを思い出します。担当はこれからも締切日に追われ、楽屋オチを考えるのかな。

◆現・議会議務局I（H17年まで）
「読んでもらえる広報に」と悩みながら10年間担当した。その間、パソコンやデジタルカメラの出現、編集ソフトの導入など、作業は多少楽になったものの「センス」が物をいう。今後も読まれる広報づくりをエール。ガンバレ2000号！

◆現・経済課M（H21年まで）
約100号分を制作した中でお気に入りだったのは『白糠の人に会いたい』。2〜3時間のインタビューとその人の想いを1ページに凝縮する作業。大変だったが楽しかった。異動後は楽屋オチのプレッシャーから解放された(笑)

◆現・税務課M（H26年まで）
平成21年から5年間、いろいろな現場を取材しましたが、中でも食生活改善推進員さんによる料理講座では、取材後に試食をさせていただいたのですが、薄味の料理に慣れていなかったため、しょうゆを掛けようとして、注意された

のを覚えています(笑)

◆現・総務課S（H27年まで）
職場や外勤先で楽屋オチを褒められたときや、新聞に自分が撮った写真が大きく載ったときのうれしさは今でもしっかりと覚えています。広報しらぬかの1000号という長い歴史の一部を紡ぐことができたことを誇りに思います。

◆現・地域防災課W（H31年まで）
一番の思い出は人生初の海外旅行となつた台湾出張。カメラのバッテリーがすぐに消耗してしまうほどの超炎天下の中、フラフラになりながらも、会場のグラウンドを駆け回りました。倒れずに最後までカメラを構え続けたあの時の自分を褒めてあげたい。

―最後はヨコ読みで…

◆現・庶務支所SS（H8年まで）
おおいなる町のがやく未来をめぐりて一歩ずつ歩み続ける中で、きみなさんに読まれる広報とうとう千号発行の偉業を達成うれしいです！！元担当として
―諸先輩の思いを引き継ぎ、これからも愛される広報紙にしていきたいと思えます。現担当STN